

TOPICS

- ① 大学政策の動向と今年度の高等教育研究開発センターの取組み課題
- ② インターンシップ事前学習と《謎解き》
- ③ センター年報原稿募集のお知らせ

大学政策の動向と今年度の高等教育研究開発センターの取組み課題

あえて、「大学政策」という語を冒頭に掲げました。これは、首相官邸や文部科学省と言った政策当局が「大学」を、社会経済活動を支える業種・業界団体の一つとみているのではないかと、いうところにあります。「大学」に属する者として、このような見方をされていることを意識していると、これまで見えていなかったことが、わかってくるような感じがいたします。

さて、高等教育政策の現状を見ていくと、久方ぶりに、大きな分岐点に差し掛かっているように思われます。

令和4年3月に公表された「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について(審議のまとめ)」では、「我が国の公的な質保証システム」として、「大学設置基準、大学設置認可審査、認証評価、情報公表」を明示し、一定程度機能しているとし評価しています。「一定程度機能」という言の背後には、十分でないところがあるということになります。そこを、改めようということでしょう。また、「国際通用性のある教育研究の質」にも留意する必要があります。ともあれ、この「審議のまとめ」による高等教育政策への影響は、おそらく「学士課程教育答申」以来のインパクトとなることが予想されます。

「審議のまとめ」のポイントのいくつかを紹介しましょう。

第1に、大学設置基準の大幅な改正が予定されています。「基幹教員」という新しい分類が登場しました。教員組織の中にどのように位置づけられるのでしょうか。

第2に、認証評価制度との関係では、令和2年の学校教育法の改正において、当該法人の「中期計画の策定」において、認証評価の結果をふまえることが明記されています。本学が継続して受審している、「民間組織」である大学基準協会の指摘・提言事項は「公的質保証システム」の一部であることを理解してください。

第3に、情報公表ですが、本職の経験をお話しします。ある大学での実地調査での出来事です。専任教員の業績リストの公表が任意事項であることが問題視されました。中等教育や初等教育のように教員免許状がない「大学」では、教員が教壇に立つことの資格証明は「研究業績」が大きな役割を持ちます。授業担当者としての個々の教員の教育研究能力の裏付けは「研究

業績」なのだということです。これを広く内外に公表していないことが問題視されたのです。

第4に、「遠隔授業に関するガイドラインの策定」があります。

第5に、大学職員について、「大学運営の専門職である事務職員等」と明記されています。本学の専任の事務局職員に対し、学校教育法や私立学校法そして大学設置基準への理解はもとより、高等教育に関する政策動向を理解・熟知されることを、そして先駆的かつ開発的なご提言・提案を期待いたします。

ところでは、高等教育研究開発センター設立当初の教育開発のテーマの一つに、本学において今日その活用が進みつつある「ルーブリック」の開発があります。「ルーブリック」については、学習成果の指標としての精度の確認等が求められてくるものと思います。

本年度、当センターに、数理・データサイエンス・AI部門が設置されました。加藤副学長のリーダーシップの賜であります。これにより、本学の情報学等の分野の教育が拡充・深化するものと期待しております。

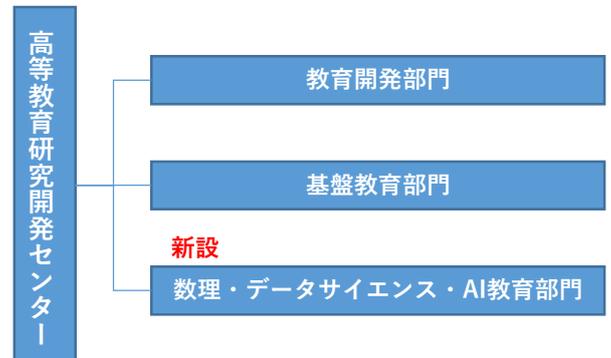


図1：高等教育研究開発センター体制図

さらに、成績評価の測定指標の開発という点では、そのベースとなる授業科目ごとの評価の方法と成績評価の分布状況等の把握が前提となります。これらの点も、今後、当センターの取組み課題となります。

(高等教育研究開発センター長 副学長 下山昭夫)

インターンシップ事前学習と《謎解き》

謎解きを試してみた

経営学部ではインターンシップ（事前事後指導を含む）を開講している。今夏インターンシップに派遣する学生数は昨年度に比して増加の見込みで、観光系の企業等との連携も回復傾向にある。今年度は事前学習を《謎解き》からスタートした。その取り組みを紹介したい。

ラーニング・アシスタント科目（LA=2年生LAがファシリテーターとなり、1年生を指導する）の取り組みに代表されるように、経営学部では学生のリーダーシップを喚起するアクティブラーニングの取り組みに力を入れている。しかし昨今の状況下では各科目で十分な機会が設けられているとは言い難く、いわゆる〈チームで働く力〉が十分に養われずに3年生となった学生は少なくない。

インターンシップ、そして就職活動に求められるのはリーダーシップとチームワークであり、その重要性を再認識してもらうために実施したのが、この《謎解き》である。

誰もがゲーム感覚で興味を持って取り組めること、目標を設定しそれに向けて協力する体制が自然と生まれること、授業で伝えた要点を印象付けることができることなど、メリットは多い。

また、あまり大声にならないため（他のチームにヒントを与えないため）コロナ禍でも不安の少ないグループワークとなる。学生の感想にも次のような声が見られた。狙い通りの効果に繋がったと言えるだろう。

- 緊張したけれど、話を進めてくれる人、聞いて聞いてくれる人、笑ってくれる人とそれぞれに良さがあって、とてもいいグループワークができたと思う。
- 初めましての人もいましたが、謎解きワークを通して自然に話すことが出来たので良かったです。グループで何か一つのことに取り組むことで、グループの結束力がついてきた感じがしました。
- 最後のSPIの問題でつまずいていたので、やっぱりちゃんと対策をしていかないといけないということを再認識しました。でもこうして学生同士相談しながら謎解きするのは、久しぶりのグループワークで楽しかったです。

謎解きの作り方

今回の《謎解き》はオリジナルに作成したもので、問題の多くは直前に講義した内容に関連している。例えば、

Q.『〇〇』という言葉には、周りを楽しませる、誰かの役に立つ、社会に貢献する、という意味合いもあります

A.働く（=傍を楽にする）

（次ページへ続く）

The image shows a worksheet for a puzzle activity. It contains three questions (Q.1, Q.2, Q.3) and a grid. Q.1 is a logic puzzle with columns A-F and rows of boxes. Q.2 is a grid puzzle with numbers 8 and 9. Q.3 is a survey question about coffee and milk. There is also a section for the answer to Q.3.

Q.①
A-Fの答えをカタカナで記入し、二重のマスを左から読め。

Q.②
右の魔法陣（縦、横、斜めの和がすべて同じ）を解き、1から7まで読め。

Q.③
レストランでコーヒーを注文した人の砂糖とミルクの使用について調査しました。
コーヒーに砂糖を入れた人は42%
コーヒーにミルクを入れた人は60%
砂糖とミルクの両方を入れた人は13%でした。
砂糖もミルクも入れなかった人は全体の何%でしょうか。

答え： %

→ ① は「 ② 」、合言葉は「 ③ 」

図1：事前学習の《謎解き》

謎解きの効果

謎解きはSCRAP社の「リアル脱出ゲーム」や、「謎解きクリエイター」の松丸亮吾氏の活躍により一般に広く認知され、観光地でのイベントから社員研修まで、様々な場所で活用されている。

という具合だ。こういった問題の答えを組み合わせることで、Googleクラスルームのクラスコードを導き出し、最終問題への挑戦権を得るという流れだ。写真は別授業（ボランティア研修事前学習でも実施した）の様子だが、「全員でピースしろ」という答えを設定し、それを実行することで次のステップに進むことができる、という作り方もある。このような共同作業もチームビルディングにつながり、有意義である。



図2：《謎解き》ワークの様子

最終的にはGoogleフォームに辿り着き、正解を入力すると“Game Clear!”となる。Googleフォームの回答者リストをスクリーンに投影しておけば、最初の完走者が出たときに自動でその氏名が表示され、会場がどよめくその空気感も《謎解き》の醍醐味だ。

デメリットは、準備が大変なことである（笑）。また、鮮度もある。一度実施したものを使い回すのはテスト問題とは逆に不興を買う恐れがあり危険である。20分程度の制限時間で解けるかどうかという難易度のものが用意できれば、十分な効果が期待できるだろう。このワークを今後も積極的に取り入れていきたい思いは裏腹に、来年度の《謎解き》をどうしようか、いまから頭を抱えているところでもある。

（経営学部観光経営学科 永井恵一）

センター年報原稿募集のお知らせ

淑徳大学高等教育研究開発センターは、2022年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第9号」を発刊いたします。つきましては、原稿を募集いたします。ぜひご投稿ください。



募集する原稿について

① 論文

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、「問題の背景、目的、方法、結果あるいは事例、考察、結論」という形で構成された研究論文。ただし、分量は図表を含み 400 字×50 枚程度を限度とします。

② 研究ノート

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、研究論文に準ずる構成を持つ研究報告、サーヴェイなど。ただし、分量は図表を含み 400 字×50 枚程度を限度とします。

③ 資料

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、学術的もしくは実践的に重要であると考えられる資料等。ただし、分量は図表を含み 400 字×25 枚程度を限度とします。

※淑徳大学の教員や職員、もしくは編集委員会が認めた者であれば投稿可能です。

申込締切

2022年7月15日（金）

淑徳大学高等教育研究開発センター（ページ下部記載）宛に、
 件名：「センター年報原稿について」
 本文：「お名前」、「ご所属」、「連絡先メールアドレス」、「タイトル（仮タイトルでも可）」、「原稿種別」、「おおよその分量」、「概要」を記載の上、メールをお送りください。

淑徳大学 高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2022 第1号
 発行日：2022年6月30日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター

TEL：043-265-7331 FAX：043-265-8310

E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp